



カクリアイヌ - 終わりのない贖罪 -

Sacrafifice

atonement for one's sin

序章 第二の故郷

西暦1961年4月、ソビエト連邦のユーリイ・ガガーリン少佐によって初の有人宇宙飛行が成功して以来、人類は宇宙への関心を次第に高めていった。国々は競ってその技術力を宇宙開発の手段に反映し、やがて人類はその増えすぎた人口を宇宙へと移民させるようになり、地球の衛星軌道上には軒並みスペースコロニーが建設された。だが人工的に造られた構造物がそう長く維持できる筈もなく、寿命を迎えたコロニーは制御を失い、衛星軌道を外れて次々に地上へと落下して行った。

落下を免れたコロニーも機能を停止し、ただの巨大な浮遊物と化すのみであった。やがて人工構造物の限界を知った人類は、母なる地球の衛星である月に目を付けた。そこを足掛かりに、人類は太陽系のあまねく星々をテラ・フォーミングし、故郷を捨てて移住するようになった。が、その頃、母なる大地・地球は、相次ぐコロニー落着のため核の冬を迎え、知的生命の居住環境としては耐えられない状態になっていた。地球がその機能を元通り回復するには、何千・何万年と云う歳月を要するであろう……地質学者や宇宙開発事業団の重鎮は口を揃えてそう言った。

一方、火星を手始めに、地殻を持つ惑星やその衛星などをテラ・フォーミングして移民した人類の子孫は、やがてこの大地も同じ運命を辿るだろう……そう考え至り、更なる外宇宙への進出に意欲を燃やした。しかし、宇宙の壁はとても高く、そして厚いものであった。恒星間移民船として開発された宇宙船も、そのエネルギーは無限であっても食料や水などの供給には限度がある。科学的に化合して作り出そうにも、その原子が無ければモノは生れ出ない。そうして主を失った無人の船は、宇宙の果てを目指して飛んで行くのであった……

それから幾千年経ったであろうか。地球から最も遠い極寒の地である冥王星を改造して細々と生き延びていた人類の子孫が、地球へと降り立った。そこは広大な海に僅かな陸地が浮かぶ、水の星となっていた。海洋生物が発達し、陸上に生きる者は皆無に等しい。だが、ヘルメットのバイザーを開けてみたら、どうだ！ 清々しいまでの澄んだ空気が舞い込んで来るではないか。

陸上への移民はもはや適うべくもなくなったが、地球はその青さを、生命の息吹を取り戻したのだ。

この自然を二度と壊してはいけない。そう誓った移民団は再び地球を離れ、伝説の星として永久に封印する事とした。そして、地球と云う名は『人類の住処』という意味に取って代わり、伝説の星は全ての始まり、『ズィーロ』と名付けられた。

更に数千年の後、人類は、恒星の周りを一定期間で周回する星々の中で、知的生命の居住に耐える気候にある星を次々とテラ・フォーミングし、それぞれを『地球』と呼称するようになっていた。その中で最も早く移住に成功した地球を、人類は『ウーノ』と名付けた。

この物語は、ここ『ウーノ』を中心に巻き起こる、二つの地球の運命を弄ぶ悪魔の子守歌である……

第一章 黒い胎動

「こちら制御室、第8プラント応答せよ！ 繰り返す、第8プラント応答せよ！！」

白衣姿の管制官が、未知の細菌を発見、研究していたプラントに対して応答を求めている。だが、レシーバーからはホワイトノイズが聞こえるだけで、誰も応答して来る気配が無い。

「おかしい、誰も居ない筈は無いんだが」

「あのプラントでは、新種の細菌を培養して、その効果と弱点について研究していた筈だ。もしかすると……」

「お、おいおい、よせよ。怖い想像は止めようぜ」

傍に居たオペレーターが、最悪の事態を想像してポツリと漏らした。それを聞いた管制官は冷や汗を流しながらその発言を否定した。いや、否定したくなるのも無理はない。何しろ、彼らの想像通りの事が起こっているとしたら、そのプラント内では既にバイオハザードが起きており、内部の研究員は既に全滅しているという事になるからだ。しかし、現に誰からも応答が無く、呼び掛けにも無言の回答が返って来るだけ。これは或いは……と危惧した管制官は、第8プラントを物理的に閉鎖した後、非常用ハッチから防護服を着用した決死隊を侵入させ、内部の調査をするよう命じた。だが、その決死隊からも突入後まもなく応答が無くなり、管制官たちの焦りははいよいよ激しくなっていた。そして遂に最高指令室からの判断が下り、第8プラントを防火壁で覆い、丸ごと焼却処分してしまうよう命令が下された。

その作業は下命後即座に開始され、開始後4時間足らずで簡易防火壁が第8プラントを覆い隠そうとしていた。そして最後に内壁の加工に掛かっていた作業員が退去し、作業ハッチが固く閉じられ、内壁に固定された火炎放射器が一斉に咆哮を上げた。と、瞬く間に第8プラントの構造体は煉獄に包まれ、炎は更に内部へと侵入。決死隊やプラント職員の亡骸と一緒に、培養器やその中の細菌をも焼き尽くす……筈であった。

そして全てが灰燼に帰し、上部に設けられた排煙塔からの煙が黒から白に変わり、やがて見えなくなると、今度は慎重に防火壁の撤去が行われる事になった。重機のマニピュレーターが最上部の排煙塔を外し、無人探査機が内部に侵入して様子を伺った。モニターには灰となった第8プラントの残骸が映っていた。

「……遺族への見舞金、保険で何とかかなるかなぁ？」

「今はそんな事を気にしてる場合じゃないだろう。内部の安全が確認できたら、サッサとコイツを撤去……」

管制官がそこまで発言しつつ、再びモニターに目をやったその瞬間……彼は言葉を失った。いや、正確には、それ以上言葉を紡ぐ事が出来なかったのだ。それは傍らのオペレーターも同様で、僅かな時間差はあったが、ほぼ同時に彼らはその場に倒れ、暫く呻き苦しんだ後に絶命した。プラント群のエリアから離れた管制室の中でその状況なのだから、隣接するプラント群がどのような状況かは推して知るべきであろう。

「ガイア様」

「……茶を楽しんでいる間は、邪魔をするなど言っておいた筈だが」

側近の男が、テラスで寛ぐ老人から叱りを受けていた。テラスと云っても、さんさんと日の注ぐ芝生の上ではない。星空の上に浮いているような光景、と表現すれば良いだろうか。そのような場所に設えられたテーブルセットが置かれているだけである。

「申し訳御座いません。只今、ノーヴェにて騒ぎがあったと報告がありましたゆえ」

「ノーヴェ？ ……ああ、あの辺境の植民地か。大勢に影響は無い、捨て置け」

「宜しいのですか？ 他の星々に影響が出る可能性も否定できないという情報も御座いますが」

「むう……」

ガイアと呼ばれた老人は、その言を聞いて漸く腰を上げ、側近に背を向けながら短く先を促した。

「何が起こったのだ」

「バイオハザードです。研究中の細菌が大気中に解放され、多大な被害が出たと報告されております」

ガイアは側近からの報告を聞き、暫し瞑目しながらその髭を弄び、やがて乾いた声で指示を出した。

「ノアをノーヴェに向かわせろ。状況を視察し、報告させるのだ」

「御意に」

側近の男は簡潔に了承の意を告げると、スッと姿を消した。それを気配のみで感じ取ったガイアは、再び座して茶の香りを愛でつつ、天を仰いだ。人間とは、何時、何処に於いても愚かで御し難い生物であるな……と嘆きながら。

「これは……酷い」

ノーヴェ……ズィーロを旅立った人類にとって9番目の地球であるその惑星に降り立った、彼女——女神ノアの発した第一声がそれであった。然もありません、彼女の眼前には近代的なビルが立ち並んでいるが生気は全く感じられず、嘗てその地を闊歩していたと思しき者たちの骸だけが、至る所で朽ち果て、無残な姿を晒していたのだから。

「生きている人は！ どなたか、生きている人は居ませんか！？」

彼女は必死に声を張り上げたが、応答は無い。空しい静寂の中、自分の声が木霊するのを聞くだけであった。

(この星は、確か最後に移民団が到着した場所……なのにこんなに進んだ文明を築いている。ズィーロの科学力を1としたら、これは10……いや、それ以上？)

そんな事を考えながら廃墟を歩いていると、コミカルな駆動音を立てながら何かが動いているのが見えた。漸く人に出会えたと喜んだノアであったが、喜んでしまった分、その正体を知った時の落胆は酷いものだった。彼女が目撃したそれは、自動でゴミを拾い歩く清掃ロボットだったのである。

(誰も居なくなった街で、あなたは一体何をしているの……何のために働くのですか)

風に舞う紙屑をマニピュレーターがキャッチすると、頭頂部にある蓋が開いてそれを放り込んだ。そしてまた、落下物を探して彷徨い歩く。そのバッテリーが尽き、動力源を停止させるその時まで、彼は働き続けるのだ。この無人の廃墟の中で……

そんな『彼』に背を向けたノアが再び歩き出した時、遙か遠くで大音響が鳴り響いた。そして間もなく衝撃波が大地を揺らし、風が一層強く吹き荒れた。

(爆発？ いや、違うわ。これは……)

空を見上げると、長い煙の尾を引いて青白く光る物体が空高く舞い上がって行った。明らかに自然の物ではない、何かが。

(宇宙船……きっとそうだわ。僅かに生き残った人たちが、脱出したに違いない)

とすると、まだ生きて助けを求めている人、逃げようと頑張っている人が居るかも知れない！ そう考え、ノアは神経を研ぎ澄まし、命の息吹を探し回った。果てしなく続く道を、たった一人で歩き回りながら……

その日から、何日が過ぎたであろうか。ノアは遂に命の息吹を感じ取る事が出来た。場所は広大な滑走路を持つ施設の一角。壊れた窓の中を風が吹き抜け、不気味な共鳴となって響き渡った。巨人サイズのドアを備えた広い建物の中にある、巨大な空洞。恐らくは空港に設えられた格納庫だったのであろう。大小さまざまな乗り物がその建物の内部にはあった。そしてその更に奥……居た。たった一人、生き残っていた人が。ノアは思わず歓声を上げ、その人影に近付いて行った。が、目深に被ったフードの奥から覗くその眼は赤く輝き、その周りの肌は青い。姿かたちは人間だが、何かが違っていた。

「あ、あなたは逃げないのですか？」

「……この星の者ではないな。いや、人の姿を持ってはいるが、人間ではない。そうだな？」

乾いた声が、纏ったフードの奥から聞こえて来た。人語だ。ズィーロからの移民が持つ、特有の言語。それを操る事の出来る者……それはつまり人間である事の証明である。

「ほ、他の人は……？」

「生きていたら、おめでどうと言ってやるのだな。此処は死したる大地、生ける者の在るべき場所に非ず」

「あなたは、どうするのですか？」

「……生き続けるさ。全ての者が滅んでも、俺は死なない。そう、最後の一人になろうともな」

一層強くなる眼光に、ノアは思わず立ちすくんだ。だが、その表情は驚きから、次第に悲しみを帯びた物に変わって行った。目の前の彼の、とても悲しく寂しい心の内が手に取るように分かってしまったから……

「発展を続ける者の終着は、即ち滅び……この星の者たちは、その業によって滅ぼされたのだ」

「……貴方の歩む道に、幸あらん事を」

ノアは光り輝く掌をかざし、男の頭上に掲げた。男はその光を黙って見つめていた。次の瞬間、彼女の姿はそこには無かった。

重々しい音を立てながら、大きな扉が開かれた。広く静かなその部屋には、ただ一人の老人が座しているだけであった。

「お父様、只今戻りました」

「……ノアか」

ドアから長く伸びた一本の石廊。その奥に設えられた大きな椅子に、老人——ガイアは座していた。傍らにあるベルを鳴らすと、スッと白いローブを纏った若い男性がガイアの傍らに姿を現した。彼の側近を務める、夢を司る神・オネイロスである。

「状況をお伺いします。ノーヴェはどのような状態でしたか？」

「街並は、そのままの姿で残っておりまして。生存者が一名……ただ、異様な雰囲気纏っておりまして。曰く、『この星は死んだ』と」

「原因等について、何か分かった事は？」

「大気中に、生物にとって非常に有害な細菌が舞っておりまして。情報として聞いてはおりましたが、想像を絶するものでした」

淡々と答えるノアの回答を、オネイロスが残らず書き留めた。その傍らで、ガイアが髭を弄びながら話を聞いていた。

「生存者の一名は、どうしたのですか？」

「脱出を希望しなかったもので、そのまま意に添う形に致しました。ただ、私の到着と入れ違いで脱出した一団があったようです。宇宙船が飛び立つのを目撃しました」

「大儀であった。ゆっくり休むが良い」

「有難うございます」

ガイアの一言により、報告はそこで終わりになった。ノアとしてもそれ以上報告すべき事は無かったので、そのまま退室し、室内は再び静寂に包まれた。

「如何なさいますか？」

「……星ひとつ滅ぼしてしまう細菌が充満した大気の中で生きられる者の存在も気になるが、大勢に影響はあるまい。細菌も、よもや成層圏を越えて他の星に影響を与える事もなかろう。捨て置いて宜しい」

「御意」

そう短く返答すると、オネイロスはまたスッと姿を消し、ガイアはまた一人になった。

静寂が全てを支配する死の星となったノーヴェから飛び立った、一隻の連絡用シャトル。10人乗りのそれに座しているのはただ一人の少女だけ。コックピットの自動操縦装置に指示した内容はただ一つ。『人類の生命反応をキャッチしたら、その星に接近せよ』ただそれだけである。

「あれから、もう500年も経ったのか。不死身の身体を持つお蔭で、水や食料が尽きた今でもこうして生き長らえているが……寂しさは募るばかり。皮肉なものだな」

少女は、そう言いながら窓の外に目を向けた。宇宙と云う大海原に飛び出して、早500年。ノーヴェの科学力によって不老不死の身体を与えられた彼女は、あの細菌漏れ事故に於いても無傷であり、何人もの人間が命を落とすのをその目でしっかりと見ていたのだ。阿鼻叫喚、白衣姿の研究員たちが次々と息絶える様は、まさに地獄絵図。それでも自分は何ともなく、こうして生きている。それが自分をこのような身体に変えた、この者たちのお蔭かと思うと、複雑な気持ちにならざるを得なかった。

『生命反応あり。二時の方向、仰角マイナス35度。距離0.05光年』

コックピットからアナウンスがあったのは、丁度そんな時だった。

(この退屈な日常に、漸く終止符が打てるか……)

アナウンスを聞いた彼女が、最初に思ったのがそれだった。感動でも、歓喜でもない。単なる『報告の受諾』でしかなかった。彼女の心はそこまで乾き切っていたのだ。

「……生命反応を追って接近、海があればそこに着水せよ」

『了解』

人間の女性のそれを模して造られた電子音声が無機質に応答し、幾つかの操縦装置が反応した。スラスターが作動し、機体が回頭を始めた。そして正面に、明るく光る恒星が目に入った。恐らくあれが、目指す惑星の太陽だろう。

「生命反応は、人間の物か？ 惑星の情報は？」

『はい。惑星ウーノ、人類が外宇宙にて初めて移民に成功した星です』

ふうん、とその回答を聞いて、少女は頷いた。どのような所かは知らないが、とにかく人間が住んでいる惑星に辿り着けたのだ。これで寂しくはなくなる、今度こそ自由に生きられる。それだけで充分だったのだ。

やがて太陽の脇を通り過ぎ、惑星の衛星軌道に乗った。そして外周を数回まわった後、大気圏に突入した。この際の緊張感は、いつの時代も変わらぬようだ。機体の外装にダメージは無いのか、進入角は合っているか……それらをチェックした後、シャトルは一気に降下を開始した。次第に大気との摩擦熱で機体の外装が赤熱を始め、窓には防護シャッターが掛かった。高度計が作動し始め、地表を感知した事を知らせた。その数値はもの凄いい勢いで減じられて行き、かなりの高速で降下しているという事を物語っていた。

「……重力圏を脱出する時も相当なプレッシャーだったが、重力圏に突入する時もプレッシャーは感じるのだな」

我ながら妙な事に感心するものだ、と一人笑いながら、少女はコックピットのシートに身を預けたまま瞑目した。そして窓のシャッターが開き、エンジンノズルの間からパラシュートが展開され、急減速によって逆Gが掛かり、少女は一瞬気が遠くなった。が、それも束の間。窓から漏れる明るい光に思わず目を覆った。500年ぶりに見た青空。ノーヴェの空も青かったが、それよりも更に青さが鮮やかな気がした。空気が綺麗なのだろう。

「ノーヴェよりも太陽が大きく見える。恒星からの距離が近いのかも知れないな」

そう感じたのは気のせいでは無かった。ノーヴェは太陽となる恒星からの距離が人類の生存に適するギリギリの距離であったので、星全体を人工空調機で温めなければならないという劣悪な環境にあり、自然は少なかった。その分科学が発達し、銀河系でもトップクラスのレベルにあったという。しかし、その空調装置が細菌の拡散を早めたのは皮肉としか言えなかった。だが、このウーノは明るく澄んだ自然の星。太陽との距離も適正で、その気候は伝説の星・ズィーロに極めて近いと言われていた。

「海だ……何と青く綺麗なんだ。水が澄んでいる。ノーヴェの緑色の海とはまるで違うぞ」

海面が近付き、シャトルが機体下部のスラスターで姿勢制御を行った。これらはオートパイロットにより操作されるので、着水に失敗する事はまず無いだろう。そして外翼を機体内に収納し、船舶に近い形状へと変形すると、いよいよ着水。ショックを和らげる為にスラスターを最大に吹かし、ゆっくりと降下した。高度計がゼロを指し、今まで縦方向に強く感じていたプレッシャーが消えた。穏やかな揺れが心地よい。

「着いたか……」

少女は上部ハッチを開き、外へ出た。宇宙船なので船舶のような甲板は無いが、機体上部は平坦に作られているので上に立つ事は出来るのだ。ただし柵が無いのであまり縁に近付くと落下してしまう。尤も、下は水なので落ちてても怪我をする事は無いであろうが。

「綺麗な空気だ。マスクなしでも大丈夫だ。それに、温かい。これが太陽の温かさか」

彼女にとっては500年ぶりの外気。しかも、これほど綺麗な空気を胸に吸い込んだ事は未だ嘗てない。船内で作られる人工酸素は清潔ではあるが、それとは違う爽やかさがあった。

「……！！ 何だ、あれは！？」

シャトルの脇を、クジラの群れが通過して行った。それを見た彼女は、そのあまりの巨大さに驚いていた。無論、ノーヴェにクジラなど居ない。いや、海水が強いアルカリ分を含む為、海洋生物そのものが存在しないのだ。

「色々と、ノーヴェとは違うようだが……住みやすい星のようだ。生き物がいるという事は、泳げるのかも知れないな」

強い好奇心に駆られた彼女は、後部の安定翼に掴まって、まず手を水に付けてみた。ノーヴェの海と違い、皮膚が変質してしまうという事はなさそうだ。ここで彼女の好奇心は一気に頂点に達した。

「誰も見てはいないし……いいだろう！」

彼女は着けていた衣服を全て脱ぎ去り、素裸になって海に飛び込んだ。が、彼女は不用意に飛び込んだ為、海水を思い切り口に含んでしまい、その味に驚いた。

「し、塩辛い！！ ……そうか、ここの海は塩水で出来ているのか。しかし、冷たくて気持ちがいい！」

驚いたのは一瞬だけで直ぐに慣れてしまった彼女は、そのまま海中へと潜ってみた。そこで見たものは、色鮮やかな魚の群れ。銀色に輝く鱗を持つもの、原色の体表を持つもの……様々な魚が、群れを成して泳いでいた。彼女はそれに混じって泳いでみた。遠洋の為か、魚も彼女を恐れない。人間に襲われた経験が無いのだろう。

(美しい……なんて美しい星なんだ。ここなら好きになれそうだ)

これが自然というものか……彼女はそう感じていた。全てが機械化された科学の星ノーヴェ。そこで生まれ育ち、あまつさえ改造まで施された彼女が、本能的に懂れていたもの……それが此処にはある。彼女は体に染みついた穢れを清めるかのように、魚たちと戯れて暫しの休息を満喫していた。

「……迂闊だった。塩水は乾燥するとベタ付くのだな」

海から上がって、今度は船上で日光浴を楽しんでいた彼女が、ふと気づいたのがそれだった。生まれたままの姿で、夢心地に浸っていたところを、急に現実に引き戻された瞬間だった。

「これはたまらん、真水で洗い流さなくては服も着られない」

彼女は放置してあった服を掴むと、急いで船内に戻ってシャワールームに直行した。ベタ付きが気になるというだけでなく、放置すれば髪や機械化された体内機構に悪影響を与えると気付いたからだった。無論、数日間であろうというものでも無いのだが、このベタ付きは生理的に不快だった。女性であれば尚更だろう。

「ふう……少々ふざけが過ぎたな。さて、人里を探さなくては」

このシャトルのコンピュータが探知した生命反応が正しければ、必ず人間が居る筈。しかし、このような遠洋に人が住むとは考えられない。彼女はレーダーサテライトを打ち上げ、現在位置から最も近い陸地を探した。すると、30キロほど北方に大陸がある事が分かったので、まずそちらに向かう事にした。

シャトルの操縦系を空間操縦用から大気圏内用に切り替え、再び外翼を展開して海面すれすれをホバークラフトのように推進し始めた。船舶と違って水の抵抗を受けないので、高速を得る事が出来る。惜しむらくは、翼を展開できても大気圏内では飛行する事が出来ない事だった。搭載してあるロケットエンジンは宇宙用の物であり、ジェットエンジンは搭載されていないのである。しかしそれでも、32ノット(約60km/h)の速度が得られれば、大陸までは30分あれば到着できる。太陽は西に傾き始めていたが、日暮れまでには上陸できるだろう。そして人間とコンタクトを取らなくてはならない。彼女ははやる気持ちを抑えつつ、陸へと向かってシャトルを走らせた。

「と、父ちゃん！ あ、あれ……」

「何だ、騒がし……い!？」

地元の漁師の親子であろうか。小さな舟をはしけに繋ぎながら獲物を陸揚げしている大人の男と、その傍らで網を畳んでいた男の子が、沖からも凄い速度で接近して来る得体の知れない乗り物を見て驚いていた。その乗り物は陸に近付くと急に速度を落とし、今度は低速で岸边をウロウロし始めた。

「わ、わっ！ こっち来るよ!」

「あ、慌てるでねえ!」

狼狽する親子を見付けたのか、その乗り物は徐々にはしけに接近し、その少し沖で停止した。そして天蓋のハッチが開いたかと思ったら、中からはこれまた見慣れぬ衣装を纏った少女が顔を出した。

「おーい！ この近くに、空港はないか?」

「クウコウ……って、何だ？ 父ちゃん」

「お、おらに訊くな！ おらだって知らねえよ!」

その声が聞こえたのか、少女は『意味が通じなかったのか?』と思い、ハッチ付近からタラップを出してはしけの脇までそれを伸ばし、コンベアに乗って親子に接近して来た。が、その様を見て親子は更に驚いてしまった。

「すまないが、訪ねたい。この辺にこのシャトルを置ける場所……何をしているのだ?」

「ど、どういう仕掛けになってるだ!？」

「ゆ、床が勝手に動いてるだよ……」

はあ? と少女は首を傾げた。ただのベルトコンベアではないか、何をそんなに驚いているのだ? と。

「そなた達は、地元の者か？」

「ん、んだ」

「なら地理には明るかろう。このシャトルをこのままにはして置けんのでな、何処かに格納したいのだが」

「あげな馬鹿でかいモン、仕舞える納屋なんかねえだよ!」

「な、納屋!？」

どうも話が通じていないようだ……と、少女はポケットから電子端末を取り出し、上空に打ち上げたレーダーサテライトから近辺の地図を受信して表示してみせた。どうやら、場所を指差して貰おうと思ったらしい。だが……

「ひええええ! こ、こんな小さな板に絵が!」

「しかも、動いとる! な、何じゃこれは!？」

本気で驚いている……これはまさか? と思い、少女は腕に付けられたライトを点灯させてみせた。すると、またしても親子は仰天してしまった。

「うわっ! 光っただ!」

「信じらんねえ……火も焚いてねえのに、あんなに明るく光るなんて」

「まさか、電気を知らないのか!？」

「デン……キ?」

そんな馬鹿な! と、今度は逆に少女の方が驚いてしまった。まさか、此処は自分たちの居たノーヴェより数百年以上も早く開拓の始まった星の筈だろう、と。しかし、現実に目の前の親子は、たかだかライトを点灯させただけで腰を抜かしていた。これは一体どういう事なのだ? と、少女は不思議に思った。

ただ一つ分かった事は、ここウーノは自然豊かな美しい星だが、文明はかなり遅れているという事である。そうなると、あのシャトルでの移動は住民を徒に怯えさせる恐れがあるし、自分自身が異端の目で見られてしまう。それはまずい。

(仕方が無い、あのシャトルは自動操縦で宇宙へ……ダメだ、ブースターが無いと成層圏を脱出できない。となると……)

暫し考えた後、少女は一旦シャトルに戻り、コックピットに何やら指示して戻って来た。すると暫くして、無人のシャトルが沖に向かって走り出し、肉眼で見えなくなる距離に達したところで海中へと潜って行った。

(私は、今からこの星の住人になるのだ。郷に入れば郷に従え……装備も護身用のものを除いて、皆捨てた。後は服だが、やむをえない。何処かで調達するでしょう)

少女は、未だ夢でも見ているかのように放心している親子に背を向け、一人旅立って行った。

第二章 幸福の王子（抜粋）

「お前は！ 何時になったら俺の言う事を理解しやがるんだ！？ いい加減、あんな王族の言いなりなんか止めちまえ！」

「僕は、僕がこうするべきだと思うから、こうして血を捧げているんだよ。父上の言いなりじゃない、これは僕の意味なんだ」

「バカか！ お前まで死んじまうつもりかよ、アイツみてえによ！！」

荒い口調で目の前の少年を責め立てる、茶髪の青年が居た。彼は濃紺の布地に金色の装飾が施された衣服を纏い、腰には剣を携えていた。武具を携帯している事から察して、どうやら軍隊に属する兵士のようである。

そしてその責めを、少々煩げに聞きながら青年に反抗する少年は、白地に金の装飾という、これまた豪華な衣服で身を包み、王家の紋章の入った胸飾りを付けていた。青年の発言から察して、王室関係者であるらしい。

「母さんは、民を守る為に自ら命を捧げたんだ。あれは父の命令じゃない、自分の意思でやった事なんだ」

「まったく、親子揃って！ いいか、アイツは確かにお前の親父かも知れねえ。だが、無理矢理にノアを孕ませた鬼畜じゃねえか！ それが俺たちの長だと！？ この国の王だと！？ ハッ！ 反吐が出るぜ！」

「相変わらずだねウィル。でもね、陛下は陛下で、民の事を思って……」

「やめろ！ 何が陛下だ、あんな……あんな下種野郎、許されるなら今すぐにでもこの剣で首を跳ねてやりてえのによ！」

青年——ウィルは更に頭に血を昇らせ、段々とその発言も危険なものになって来た。こんな会話を誰かに聞かれたら、途端に彼は捕えられてしまう。それを危惧した少年——ランスロットは、クルリと背を向けて、窓枠にもたれ掛かって外を見ながら、ウィルに向かって穏やかに語り出した。

「ウィル、見てごらん。街はいま、こんな惨状なんだ……その為に君たち騎士団が奮闘している。でもね、騎士団が倒している相手だって、元は人間だったんだよ。それに、彼らは僕の血を一滴飲ませるだけで、元の姿に戻れるんだよ……だからウィル、殺しちゃいけない。彼らは化け物じゃない、人間なんだ」

「……人間を襲うようになっちまった時点で、立派に化け物さ。だから退治する、それが俺たちの仕事なんだ」

「ウィル！」

「悪いが、仕事に戻らせて貰うぜ。俺は戦果報告に来ただけだ、油を売りに来た訳じゃねえ」

そう言うと、ウィルは勢い良くドアを開けて退室して行った。後には耳が痛くなるような静寂と、その中に佇むランスロットだけが残された……ように見えるが、その傍らには彼の母——女神ノアが優しく微笑みながら、ランスロットの傍に立っていた。しかし彼女は実体を持たない、いわば霊体となってそこに居るだけなのだ。肉体は先程ウィルが発言した通り、既に滅んで消失しているのだった。

「ごめんなさいね、ランスロット。私が死ななければ、貴方にこのような思いをさせる事も無かったのに」

「やめてよ母さん、母さんのした事は間違いじゃない。それに母さんが死ななくても、僕は母さんの手伝いをしていたと思うよ」

ニコッと微笑むランスロットを見て、ノアもまた微笑みを返す。だが、その笑みには少々陰りが見えた。

「大丈夫だよ母さん、ウィルだって分かっていると思うから」

「そうね。彼のあの気性は、優しさの裏返し。ただ、その優しさの指す方向が間違っているの。早く気付かせてあげたい……」

ポツリと本音を漏らし、ノアは俯いた。そう、彼——ウィルが変わったのは自分の所為なのだと考え、それが許せないのだった。

「ところで母さん、千年前に起こったっていう、ノーヴェのバイオハザードもこんな感じだったのかな？」

「分からないの。私が着いた時には既に壊滅状態で、不思議な人が一人いただけだった。恐らくあの人も、あの後間もなく……ロケットが打ち上げられるのを見たけれど、そこに乗っていた人が無事かどうか……」

ランスロットは『ふうん』と頷いて、蟲化の深刻化に怯える民を自分一人で救えるのか、その事について考えていた。

「母さんがウーノに来たのは、いつ頃だった？」

「最初に来たのは80年ほど前。そして30年ぐらい前に再来して……以来ずっとここに居るわ」

そしてノアは語った。人類の蟲化が始まり、このウーノが劇的に変わり始めた頃の事を。

(中略)

「いいよ、一人で大丈夫だから」

そう言って、ランスロットは単身で城下に出た。紺碧の青空に浮かぶ太陽。これだけを見れば、至極平和な街並みであった。が、一瞬の油断が命取りとなる危険な街……いや、その脅威は星全体に及んでいるのだ。

「段々、酷くなるね。僕の血だけで何とか出来るか……いや、やらなきゃいけないんだね、母さん」

「無茶はいけないわ、ランス。私のようになってからでは……危ない！」

「……！？」

油断だった。完全に頭上を取られた形で、蟲が降って来た。この体制からでは防御も出来ない。結界を張っている暇もない。万事休す、であった。が……真上から降って来た筈の蟲は彼のやや前方に落下、その体からは薄く煙を引いていた。

「騎士の銃……？ 違う、音がしなかった」

「ポーっと歩いているからだ、その立派な装備が泣くぞ」

未だ、何が起こったか理解できずにいたランスロットの背後から、突然掛けられたソプラノボイス。ハッと振り向くと、そこには見慣れぬ装備を携えた少女が立っていた。甲冑とドレスを合わせたような居出立ちの彼女は、その装備を脚に付けたホルダーに収めると、ゆっくりとランスロットに近付いて来た。

「怪我はないか」

「た、助かりました。危ないところを有難うございます」

「礼には及ばない。ところでそなた、王宮の者か？」

「え？ あ、ああ、はい」

ふん……と鼻を鳴らし、少女は背を向けた。ランスロットはそんな彼女に、慌てて声を掛けた。

「あ、あの！ 助けていただいたお礼がしたいので、一緒に来ていただけませんか？ 僕はランスロット・パロ・サザーランドと申します。一応、国王陛下の縁者です」

「礼には及ばぬと言った筈だが……王の縁者だと言ったな？ 私はエトワール、流浪の戦士だ」

長い髪をなびかせ、エトワールと名乗る少女は振り返った。彼女の目はまるで射抜くような鋭い視線でランスロットを見て、やがて同行を承諾した。だがその時、ノアは彼女がただならぬ雰囲気を感じている事を、瞬時に見抜いていた。

(彼女、ウーノの子じゃない。この雰囲気、この独特な匂い……確か何処かで……)

記憶を手繰り寄せるが、直ぐに思い出す事は流石のノアにも無理だった。だが、程なくして彼女は気付く事になるのだった。少女——エトワールが、嘗て視察に赴いたノーヴェからの移民である事に……

第三章 悪夢の予感（抜粋）

（前略）

「お待たせして申し訳ありません、国王陛下に……どうなさったのです？」

貴賓室では、エトワールが窓辺で爪を噛みながらウロウロしていた。テーブルにはキッチンと食事が用意され、飲み物のボトルを用意したボーイも出番を待っていた。なのに何故彼女は席に着かないのだろうと、ランスロットは不思議に思ったのである。

「お、遅いではないか！ わ、私は、その……こういう席が苦手なのだ、落ち着かなくて敵わん」

「あー、お気に召しませんでしたか。済みません、もう少しフランクな食事に変えてください」

エトワールが落ち着かずにいる理由が『食事の好みが合わない所為』かと勘違いをしたランスロットは、ボーイに声を掛けて、メニューを変更するよう頼もうとした……が、どうやらそうでは無いらしい。

「そ、そういう意味ではないのだ！ だ、だから礼は要らぬと……私は、そなたに話があって、その……済まないが、人払いをしてくれるか？ 注目されるのは、ちょっと苦手なんだ」

「は、はあ、そういう事でしたら……済みません、皆さんは外していただけますか？」

人前が苦手なのか、と漸く気付いたランスロットは、食事を下げると同時に部屋を空けるようボーイやメイドに指示を出した。いや、指示を出した、と言うよりは『お願い』に近いニュアンスであったが。

「た、助かる。それから、その……」

「何でしょう？」

「その、むず痒くなるような喋り方もやめてくれ。話し辛くていけない」

その言葉に、ランスロットは思わず目を丸くした。然もありなん、初対面同士、しかも相手の方が今のところ立場的に優位を占めるので敬意を表してこの言葉遣いにしていただけなのだが、それを否定されたのだから。

「喋り方、って……恩人に敬意を表するのは当然の……」

「私は蟲退治をただけだ！ たまたま、その下にそなたが居たに過ぎん」

はあ……と、何故か丁寧口調や折り目正しい態度を敬遠しながら言葉を紡ぐエトワールに、ランスロットは『訳が分からん』といった感じの表情を向けるが、やがてパッと両手を広げ、胸を開く格好でニコリ笑い、改めて問い掛けた。

「そういう事なら……これで良いかい？ エトワールさん」

「……まあ、良かろう。まだ少し尻の据わりが悪いが、やむをえん」

「で？ 僕に何か話があるような口ぶりだったけど」

「そなたは先程、蟲に襲われ掛けていたが。あんな事がしょっちゅうあるのか？」

「え？ あ、うーん……いきなり上を取られたのは初めてかな。外を出歩いていて、蟲に遭わない日は無いけど」

そこまで聞いて、エトワールはまたも唸り始めた。何が訊きたいのか、何を知りたいのか。それが分からないランスロットは、どうする事も出来ずに次の発言を待っていた。

「確か、この国には蟲に対する特効薬があると聞いてやって来たのだが……それらしき物を見た事が無い。ただの噂話だったのか？」

「特効薬って、それ……何処で聞いたの？」

「山を越えた向こうの、小さな国でな。宿を貸してくれた老夫婦に聞いたんだ。女神様が降りて来て、金色に輝く風を振り撒いたら、一面の蟲たちが人間になった、と……いや、信心深いご夫婦だったからな、神話と現実を取り違えていたのかも知れん」

山を越えた……って、ただの山じゃないぞ、山脈だぞ！？ と、ランスロットは驚愕の表情でエトワールを見た。その華奢な身体は何処に、そんなスタミナがあるんだ？ と。しかし、その発言より更に衝撃的な回答が、逆にエトワールを襲った。

「どうやって山を越えて来たかは、まあ問わないとして。その話はいつ頃の話だか、訊いたかい？」

「かれこれ30年ほど昔の事らしいが……何か心当たりがあるのか？」

「それは多分、僕の母さんの事だと思う」

「……は！？」

サラッと言い放たれたその一言に、エトワールは思わず固まってしまった。然もありなん、女神降臨の話をしたのに、返って来たのは『母さん』と云うキーワード。これで驚くなど言う方が無理である。

「そなた、今……何と？」

「だから、それは僕の母さんの事だよ、って」

「ば、バカも休み休み言え！ 世界中の何処を探したら、本物の女神に会えるというのだ！ 大体、今の話が本当なら、そなたは……」

そこまで言い放った直後、エトワールは言葉を失った。彼女の目の前で、信じられない光景が展開されていたからだ。何と、窓の外を一瞥し、かざされたその手から金色の光が放たれ、その光が当たった雲がスッと晴れて、光が差しこんだのだ。

「驚く事は無いでしょ、女神の子なんだから。このぐらいは出来るよ……尤も、半分は人間なんだけどね」

「お、驚くな、だと……？ む、無理を言うな！」

見れば、エトワールはすっかり驚いて腰が砕け、その場にへたり込んでいた。彼女も良くその体の強靱さと、ウーノには無い強力な装備で驚かれる事はあるが、今の光景は『驚く事は無いでしょ』で済むレベルではない。もはや次元が違っていった。

「その老夫婦が女神の姿を見たと言うのは、たぶん母さんが二度目にこのウーノにやって来た時の事だと思う。一度目は手立てが分からずに敗走したって聞いているから」

「ウーノ、という名を知っている……？ そなた、やはり……」

「だから言ったでしょ、女神の子だって」

ニコッと笑みを向け、ランスロットは未だへたり込んだままのエトワールに手を差し伸べた。が、彼女は何故か赤面しながら『一人で立てる、子供扱いするな！ 年下のくせに』と言ってプイとそっぽを向いてしまった。最後の一言が少し引っ掛かったが、童顔のお姉さんなのかな？ と強引に納得し、彼はまた笑顔に戻った。しかし、またも何か考え込んでしまったエトワールを見て、思わず肩を竦めるのだった。

「なん……だと！？」

「だから、君が言っていた『特効薬』の正体は、母さんと……その子である僕の血なんだよ」

ランスロットが神の子である事で驚いたその直後、エトワールは更なる衝撃的な事実を知って愕然とした。まさか、探し求めていた秘薬の正体が、神の血であったとは……と。しかも、他の神では駄目で、神の長ガイアの子孫であるノアとランスロットに、その力がある……逆に言えば、ノア亡き今、その役を請けられるのは、ランスロットただ一人だけという事になる。更に、聞けば女神ノアは国王サザーランド16世による血の搾取を受け、辱めを受けて死んでいったと云うではないか。そんな男に媚び諂い、敢えて縋る意味が分からないと、エトワールは憤慨した。

「聞けば聞くほど、愚劣さが浮き彫りになるだけではないか！ そんな男に長を任せるなど、民は一体何を考えているのだ！？」

「そう言わないで。父は……陛下は民の為、自ら進んで汚名を被っているんだ」

「実の子の血を抜き取り、高価で取引する男を庇い立てするのか？ そなたは！」

「人が何と言おうと、僕にとっては親なんだ。味方になるのは……」

と、そこまで口に出し掛けた時、ドアがノックされランスロットは侍女から問い掛けを受けた。晚餐の支度をどうするか、という質問であった。そのような事で大事な話を……とエトワールは益々憤慨したが、反対側のドアから彼女を呼び寄せる人物があった。ウィルである。

「……そなたは？」

「アンタが奴を助けたって話を、小耳に挟んだんでな。俺は奴のお守り役で、ウィルって言う。宜しくな」

突然、眼前に現れて気さくに話を始める男を一瞬警戒したエトワールだったが、ランスロットと近い仲の者と名乗る以上、怪しい人物では無かろうと思いつき、自らも自己紹介を始めると共に、今の会話の率直な感想を述べ始めた。

「エトワールだ……あの男は一体、何を考えているのだ？ やっている事はただの自己犠牲、しかも国王の私利私欲を助長しているだけではないか」

「バカ正直が服を着て歩いているようなもんさ……という訳でだ。話を聞く限り、どうやら利害は一致するようだな。どうだ、この際手を組まねえか？」

「手を？」

「ああ。今この国で、あのバカを止められるのは俺とアンタしか居ねえ。俺としちゃあ奴が国王の餌になったまま殺されるのを

黙って見てるのは忍びないし、アンタだって奴を守らなきゃ世界を救えない事が分かっただろ？ ならば、やるべき事は同じになる筈だ」

その提案に対する回答を、エトワールは少々躊躇した。確かに彼を守らなければ、この星の人類はいずれ滅んでしまうだろう。だが、目の前にいるこの男と手を結び、共同戦線を張る必要性が認められないのである。彼女には、もし必要に迫られた場合でも自分一人でランスロットを守り切れる自信があったからだ。よって、この件に関する回答は少し待つて欲しいという事にして即答を避け、会話は一旦終了した。

「失礼、話の途中だったね……とにかく僕は、今この世界を救えるのは自分一人しか居ない事を良く知っている。そしてそれを有力者が牛耳って支配しなければ、我が身を守ろうとする者達によって僕は殺され、骨の髄までしゃぶり尽くされるだろう。それを防ぐ為に、陛下は敢えてあのような措置を取っておられるんだ。確かに母を殺された憎しみはあるよ。けれど、彼の存在が無ければ、僕は生きている事すら出来ないんだ」

その台詞が、何処まで本当なのかはエトワールには分からなかった。だが、全ての民が彼の血液こそが蟲化を防ぐ唯一の秘薬だという事を知っている以上、最高権力者である国王によってその存在を守られ、血液の搾取も管理された上で行われなければ彼は本当に殺されてしまうだろう。だとすれば、取るべき道はただ一つ。

「良く分かった。そなたは絶対に守らねばならない存在なのだという事がな……その役目、この私が担う」

「……え？」

「私はノーヴェからの移民者だ。遺伝子操作と、肉体の部分機械化で永久に止まらない心臓と、劣化しない細胞を手に入れた、不老不死の肉体を持った……な。だから、ここウーノの兵隊なんかよりは余程丈夫だ。ボディガードには打って付けだろう」

「あ、あの？ ど、どうしてそういう話になるかなあ？」

突然方向性を変えた話題に付いて行けず、ランスロットは狼狽し始めた。今は確か自分の事情と国王の立場に付いて説明していた筈。それがどうして『僕を守る』話に変わってしまうんだ？ という事が分からなかったのである。そして更に、その会話に介入してくる男が居た。それが誰だかは、語るまでもあるまい。

「ふうん、何か見慣れない装備を付けてるし、ここの事情にも疎いと思ったら……まさか外国からのお客様だったとはねえ。納得だよ、お嬢さん」

「……エトワールだ、先程名乗った筈だが？」

「洒落の分からねえ嬢ちゃんだなあ……まあいい、これで事情は此処に居る全員が把握した訳だな。俺とアンタ、それにランスと……ノアがな」

「え？ も、もう一人居るのか？ ど、何処だ！？ と云うか、ノア！？ 先だって話題に出た、女神ノアか！？」

ウィルの台詞を聞いて、エトワールは思わず周囲を見回した。だが姿はおろか、気配すら感じられないその存在は、彼女に見付けられる筈は無かった。

「母さんはね、僕が小さい頃に国王によって大量の血液を搾取されて死んでしまった……それはさっき説明した通りだよ。けどね、今も僕の……いや、そこの彼、ウィルの傍に立っているよ。肉体を持たない精神体としてだけけど」

「そ、それはもしや幽霊……！？ じょ、冗談だろう？ わ、私はそのような非科学的なモノは……」

「ちょ……どうしたの？ 顔が青い、気分でも悪いのかい！？」

「そっ、そなたの所為だ！」

その台詞を聞き、ランスロットは『どうして？』と云う表情を作った。それを見たウィルとノアは思わず苦笑いを浮かべた。そしてエトワールは……その場にへたり込んでランスロットの脚に縋りつき、ふるふると震えていた。百戦錬磨の戦士である彼女の、意外過ぎる弱点がここに露見したのだった。

(中略)

「んー……やっとならぬ。3日間の休暇が終わったら、また7日間城に缶詰だからな。この機会にゆっくりと休ませて貰うか」

「私がお城に来た頃は、騎士の方も、もう少し緩やかな勤務だったと思うのですが」

「情勢が変わった、って事だろうな。蟲化の勢いもだいぶ強くなって来てるし、斬っても斬ってもキリがねえよ、ったく」

出来れば、斬らずに解決して欲しい……それがノアの望みであった。しかし、退治する以外の手段が愛息の血による浄化しか無い以上、騎士団による対処も止むを得ない。胸が締め付けられる思いであったが、仕方が無い。それに彼らとて好きで蟲を斬っている訳では無い……それが分かっていたから、ノアも強く意見は出来ないのだった。

「さ、ここが俺の家だ。狭くて汚ねえボロ屋だが、入ってくれよ」

はにかみながら、ウィルはドアを開けてノアを招き入れた。そしてダイニング兼リビングである、唯一の応接間に彼女を案内したのだが、そこで彼らは信じられない光景を見る事となった。既に身体の一部が蟲に変化している女性が、横倒しになって呻いているのではないか。しかもその女性は……

「お、お袋！！」

「……え！？」

ウィルは慌ててその女性——自分の母を抱き寄せ、意識の有無を確認した。すると、重そうに瞼を開き、黒目をウィルの方に向けた。そして口を動かし、何かを訴えようとしていた。まだ辛うじて意思の疎通は可能であるらしい。

「ウィ……ル……触っちゃいけない……あなた……まで……」

「いい、喋るな！ ……クッ、得体の知れねえ毒霧め！ マジで遠慮がねえらしいぜ！」

「待っていて、ウィル！ 直ぐにランスロットを……」

「よせ！ 奴の血は、この世界の只一つの希望なんだ。一滴だって無駄には出来ねえ……そいつはノアだって充分に知っている筈だろ？」

でも……と食い下がるノアを、ウィルは俯きながら制した。その噛み締めた唇から一筋の赤い筋が伸びた。それを拭いながら、彼は悔しそうに吐き捨てた。これを飲ませて効くのならば、幾らでも飲ませてやるのに……と。

(ウィル……貴方もやはり、心の奥底に眠る気持ちはあの子と同じなのね。本当に優しい人……)

そう考えている間にも、母親の身体はどンドン蝕まれて行った。あと数分で意識も支配され、完全に蟲化してしまうだろう。

「ウィル……最後のお願いを……聞いて……私は……人間のまま……天に召されたい……」

「……！！ 俺に、トドメを刺せと？」

「それが……出来るのは……あなた……だけ……」

絞り出すように発せられる声も、次第に力が弱くなり、徐々に聞き取り辛くなっていった。もう時間が無い事を、彼女は悟っているのだろう。

「ノア……俺は一体、どうしたらいい！？」

「……！！ 言えない……私には何も……ごめんなさい！！」

既に涙を零し、俯くノアは……本当に掛けてやれる言葉が無かったのだろう。申し訳なさそうに首を横に振るだけだった。

「ウィ……………ル……」

母親は最後の力を振り絞り、ウィルの手を剣の柄へと導いた。急いで、という……彼女からの、最後の願いだったのだろう。

「……1秒だけ、我慢しろよ。直ぐに済む」

剣の鯉口を切る音が聞こえ、直後に空を切り裂く音が室内に響き渡った。そして次の瞬間、母親の首は胴から離れ、ゴロリと真下に転げ落ちた。既に下半身は蟲化してカサカサと動いていたが、脳からの指令が届かなくなると、まだ人の面影を残した上半身に少し遅れてその動きを止めた。鮮血が壁や窓を赤く染め、ウィル自身も腕に返り血を浴びていた。

「……間に合った……のか？ なあ……お袋」

そう問い掛けながら、ウィルは両手で母親の首を抱き止めた。瞑目した彼女の顔は、さも笑っているかのように穏やかだった。

亡骸を簡素な棺に納め、小さな墓標を立てて祈りを捧げ、ささやかな葬儀は終了した。牧師は『幸あらん事を』と最後に告げ、去って行った。そこに残されたのは真新しい墓標とウィル、そして傍らで彼を見守るノアだけであった。

「なあ、ノア。お袋が、あのサザーランドの妹だって事は、話したよな？」

「ええ。貴方と出会ったばかりの頃に聞いたわ」

「縁を切られた間柄とは言え、肉親には違いねえ筈だ。なのに、花の一輪すら添えに来ねえ。冷てえ野郎だと思わねえか？」

その問いに、ノアは黙って頷き……そして『彼は、可哀想なお人です』と一言添えた。

ポツリ、ポツリ……水滴が落ちて来た。ノアは『涙?』と思ったが、自分は泣いていない。ウィルもその真新しい墓標に目を向けたままジッとしているが、涙は流していない。やがて、大粒の雨が一面を覆い、瞬時にして彼の身体と小さな墓標を洗い始めた。

「ウィル、風邪をひいてしまうわ」

「ノア、俺は……俺の本当の名は、ウィルフレッド・サザーランドって云うんだけどよ。今日ここで、サザーランドの名を捨てるぜ。親父は俺が生まれる前に死んじゃったらしいんだがよ。勇ましい、男の中の男だったそうさ。だから俺は、たった今から親父の名を継いで、こう名乗る。ウィルフレッド・マクラレンってな！」

剣を抜き、高々と掲げながら彼は宣言した。その顔は強い雨粒に遮られて良く見えなかったが、その瞳はしっかりと空を睨み、口を真一文字に結んでいた。きっとそれは、過去との決別を決意した男の顔だったに違いない。

「……すまねえ、お袋。アンタの生まれを恨む訳じゃねえが、俺はあの男を……サザーランドを絶対に許せねえんだ。けどな、俺がアンタの子だって事は、未来永劫変わる事はねえ。だから、安心……」

「ウィル……こういう時ぐらい、涙を見せたって……誰も笑いはしないわ」

「……本当か？ 笑わねえって……約束、してくれるか？」

「神に誓って」

「……アンタ自身が、女神じゃねえかよ」

そう言って、ウィルは泣き笑いの表情を彼女に向けながら、剣を収めてノアの前に崩れ落ちた。そして泣いた。大声で泣いた。俺はお袋をこの手に掛けた、咎人なんだ……そう嘆きながら。だが、ノアはその発言を優しく否定した。

「貴方は咎人なんかじゃない。お母様の最後の望みを聞き届けてあげた、聖者よ。間違いないわ」

その声が、彼に届いたかどうかは分からない。しかし、今この瞬間……新たなる修羅がひとり誕生した事は、間違いなかった。

第四章 大空の上には（抜粋）

（前略）

「そう言えば、さ……」

「ん？」

窓辺にもたれ掛かり、ぼんやりと外を眺めていたエトワールにランスロットが声を掛けた。

「さっき、孤児だって言ってたよね。それに、ノーヴェからの移民だとも……という事は、一人で旅をして来たのかい？」

「ああ、その通りだが。何故、そのような事を訊く？」

「いや、確かノーヴェから此処までは、光速で移動しても500年は軽く掛かる筈。しかし君は……」

それにしては若すぎる、と言おうとしたのだろう。だが、その台詞が出る前に、エトワールが自らの声でそれを遮った。

「……遺伝子操作と改造手術で、死ねない身体にされたと言った筈だ」

その顔は窓の外へ向けられていた為、表情を読み取る事は出来なかった。しかし、ランスロットの耳の届いた声は、心なしか悲しげに聞こえた。いや、このような悲痛な話を二度もさせられたら、誰であっても良い気分はしないであろうが。

「ゴメン、悪気はないんだよ。ただ、にわかには信じられない話だったんでね。聞き返して悪かった」

「構う事は無い。どうせ死んだ星、捨てた故郷だ。どうなろうと知った事では無い」

そして彼女は語った。故郷ノーヴェで、自分がどのような仕打ちを受けて来たのかを……

「……ちょ、どうしたの!？」

食事を運んで来た職員がいきなり倒れたのを見て、鉄格子の中に座していたエトワールは驚いたように声を掛けた。だが、その職員は既に白目を剥いて絶命しており、呼び掛けに対しても無言の回答を返すだけであった。

「ふん……バカな事をしたもんだ。あの細菌は熱に強く、炎なんかじゃ焼き殺せない。むしろ建物に封じ込めておいた方が安全だったのに。わざわざ建物を壊して、更に熱で煽って菌を拡散させるとはな。ククク……天罰観面とはこの事さ」

「兄上？ 何かご存知なのですか!？」

「言った通りだ、俺達をこんな目に遭わせた天罰が下ったのさ。この愚かな人間どもにな」

壁の向こうから聞こえて来る声に、エトワールは抗議するかのような声を浴びせた。確かに人間に恨みはある。しかし、このような事態を笑って見ていられるほど自分は随ちてはいない、と。

「何を言う、お前だって憎んでいただろう？ 弄ばれ、甚振られ……その挙句に死ねない身体にされた事をな……ここを出るぞ、壁から離れているんだ」

「え……？」

次の瞬間、鈍い音と共に両者を隔てる壁が崩れ、凄まじい埃が舞った。そしてその向こうから、青い肌に鱗を纏った異形の青年が姿を現した。彼の名はジークフリード。非道な人体実験を受け、且つ身体を部分的に機械化された『生物兵器』の験体である。だが彼はその外見が醜悪になってしまい、目立ち過ぎるという理由により改造途中で放棄され、以来ずっと幽閉され続けて来たという過去を持つ為、人間に……いや、人類に深い憎悪の念を持っていた。

「けほっ、けほっ……何て野蛮な！ 鍵に細工をすれば、このような……」

「面倒な事は嫌いだな」

「やれやれ。すっかり粗野な性格になってしまったのですね」

パンパン、と衣服に付いた埃を叩き落とすと、エトワールは青年の方に向き直り、キッと視線をきつくした。彼女はジークフリードの実の妹で、同じく人体実験を受けた被験者であるが、実は実験が施されたのは彼女の方が早かった。その所為か、機械化された個所もジークフリードに比して幾分か少なく、兵器としての改造も施されていない。何故、年下である彼女の方が早く実験を受けたのか……それは、この9番目の地球——『ノーヴェ』に於ける富裕層と貧困層の格差が激しく、彼らがその貧困層に属していた事に起因する。

スラムを形成し、その中で暮らしていた彼らは、当時は穏やかな性格の仲睦まじい兄妹であった。が、その両親が生活の為、

エトワールを研究施設に売り渡したのである。その事実を知ったジークフリードは怒り狂い、研究施設に殴り込んでその身を拘束された。そして牢獄の中で二人は再会したが、その時既にエトワールは生体実験を受け、改造された後だったのである。

ジークフリードにメスが当てられる時、科学者たちは『もっと面白い事をやってみよう』と笑っていたという。そして再び目を開けた時、彼は循環器や呼吸器などを機械化され、エトワールと同様『死ねない身体』になっていた。しかも、エンシェントドラゴンの細胞を植え付けられ、その外観は次第に変化して行き、肌は青く、全身は強固な鱗で覆われ、頭部には一对の角が生えるという異形の姿となって、自らの意思で展開・収納が可能な翼と、岩をも片腕で砕く怪力を併せ持った生物兵器——キメラにされたのであった。しかし、その外観があまりに醜悪であった為か科学者たちが生理的に受け付けなくなり、実験は中断され、彼は中途半端な改造を受け、人間でもない、化け物でもない……極めて曖昧な存在として、長期間放置され続けたのである。そんな彼が人類に対して激しい憎悪の念を抱くのも、無理からぬ事であった。

「この細菌は、やがてノーヴェ全土に行き渡る。この星は死の星となるのだ……当然の報いだな」

「私とて、人類に恨みはあります。しかし、このような手段は好みません」

「俺がやった訳ではない、勝手にこうなったのだ」

「……死ねないと云うのは、とても悲しいものなのですね」

そう言うと、エトワールは残されていた恒星間移動用シャトルに乗り込んだ。

「兄上は、どうなさるおつもりで？」

「俺か？ ふむ……この星の無様な姿を見届けても良いが、まあ、時間は永遠にあるのだ。ゆっくり考える事にするさ」

それが別れの言葉となった。兎に角、生命のある星へ……別の地球へと望みを託してコックピットに乗り込み、生命反応探査装置と自動操縦装置を連動させると、エトワールを乗せたシャトルはマストライバーを駆け上がり、宇宙へと飛び立って行った。それを見送ったジークフリードは、ふん！ と鼻を鳴らすと、マントを翻し、当ても無く旅立って行った。

「じゃあ、ノーヴェにはお兄さんが？」

「ああ。生きていれば、だがな。しかし、幾ら不死の身体を得た身とはいえ、あの細菌が充満した大気の中で、そう長く生きられる筈は無い。恐らくは、もう母星の土となっているだろう」

何とも……と云った風に、ランスロットは驚愕の表情を見せた。この幼ささえ感じさせる少女が、そのような凄惨な地獄を見て来たとは、想像だにしていなかったのだ。そして彼は思い出していた。嘗てノアが話していた『ノーヴェで出会った不思議な人』の話と、その時に打ち上げられたというロケットの話。その『不思議な人』がエトワールの兄であり、飛び立ったロケットにエトワールが乗っていたのだという事に彼が気付くまでそう時間が掛からなかったと云うのは、もはや語るべくもあるまい。「そして私はこの星に降り立ち、各地を旅して回った。自然豊かな、美しい星だと思った……しかし、腑に落ちない所がある。ここウーノは、ズィーロを発った人類が初めて到達した惑星だった筈。なのに、何故こうも文明の発達が遅れているのだ？」

「ああ、その事か。うん、僕も母さんから聞いただけだから、詳しくは無いんだけど……」

そう言って、ランスロットは一冊の本を取り出し、広げてみせた。古い文字で記された手書きの本で、何とか読む事は出来る、という代物だった。ズィーロからの移民者が開拓時代に残した、古文書であるという。

「これ、最初に見た時は僕もまだ小さくてね。読めない所が沢山あったから、母さんに読んで貰ったんだ……ええと、移民団がここウーノに辿り着いたのが、約5千年前だとされているね。君たちのノーヴェより、2千年ほど早く移民が始まった事になるんだな」

ページを捲りながら、ランスロットは続けた。何しろ古い記憶である上に、本に記された文字自体も所々掠れていたり、酷い場所になるとページが欠損していたりして、非常に読み辛い状態だったので。

「このような貴重な資料が、何故ポンと出て来るのだ？」

「んー……それは僕にも分からないけど、ここ王宮だからね。こういう資料が残っていても、不思議じゃないと思うよ……続けるね。ズィーロの自然を目の当たりにし、その美しさに憧れを持っていた人類は、ウーノを発見した時に大変驚いたそうだよ。あまりにズィーロにそっくりだったらしいから」

ふうん……と、興味深そうに紙面に目を落としながら、エトワールは頷いていた。そして、彼女は理解した。最初の移民団が科学を捨てて原点回帰する為に、移民船や科学によって作られた道具類を、基礎開拓が済んだ時点で全て放棄した事を。因みに、

この歴史については、ごく一部の upper class にのみ伝えられ、庶民がそれを知る事は無かったのだという。

「そういう訳だったのか……という事は、ノーヴェはその正反対を歩んだという事になるのだな。尤も、あの星は人類の生存にギリギリ適合した環境で、かなりの改造をしなければ住めない星だったようだからな。太陽は遠く小さいので空は薄暗く、熱も届かないので空調設備を至る所に施して、漸く生存が可能になったそう。つまり、科学に頼らなければ生きる事さえも儘ならない、不幸な星だったのだ」

同じ『地球』でも、随分と違いがあるんだな……と、ランスロットは驚いていた。何しろ、彼が生まれたのは僅か17年前。しかも神の子でありながら、生誕当初は低い扱いを受けていた。ノアの没後、彼の血液も蟲の浄化作用があると判明してからは厚遇されるようになったが、それまでは他の地球の事を学ぶどころではみ無かったのだ。残念ながら、彼が物心ついた時には既に、人類の蟲化はかなり深刻な状況になっていたのである。

「……ん？ あれは……大変だ、誰かが蟲に襲われている！」

「え！？ 大変だ、助けに行かないと！」

「間に合わん！ ……やむをえん、許せ！」

言うが早いか、エトワールはバツとスカートを捲り上げ、中に隠されたホルスターから拳銃を取り出し、窓の外に向けて引き金を引いた。銃口から放たれたのは、ウーノの銃の弾丸とは違う、赤い熱線だった。

「間一髪、間に合ったようだな。高貴な身分の者なのか？ 王族と同じ服装をしているが……どうした？」

「え、エトワール……その銃は何？ 火薬で弾丸を撃ち出すんじゃないの？ それに、その……」

「どうした、言いたい事はハッキリ言わないと分からないじゃないか」

「い、言っているのかな……その、スカート……捲れたままなんだけど」

「……！！ 馬鹿者、見るな！！」

刹那、ランスロットは白昼の空に星を見た後に語った。が、その直前まで見えていたスラリと伸びた美しい脚と、その奥に映える純白の下着は彼の脳裏にしっかりと焼き付き、暫く忘れる事が出来なかったと云う。

(無償版は此処までとなります。その後の展開は本編にてお楽しみください)